

## 「学校規模」と児童の人間関係及び学校モラル

佐藤 静一\*・今福 嘉代\*\*

### Effects of School Size on Children's Human Relationships and School Morale.

Seiichi SATO and Kayo IMAFUKU

(Received November 15, 1996)

The present study attempted to analyze the effects of school size on children's human relationships (with teachers and among children) and school morale (homeroom solidarity, satisfaction at school, mutual assistance and cooperation, and mental / physical security). The subjects were 719 fifth grade students (22 classes) of 8 public elementary schools. The eight schools contained 2 large scale schools with 6 classes per grade, 2 middle scale schools with 3 classes per grade, and 4 small scale schools with 1 class per grade. The numbers of students and teachers per school were about: 1,200 and 43 respectively at a large scale school; 600 and 25 at a middle scale school; 90 and 11 respectively at a small scale school. The main results were as follows: 1. School morale (except for mental / physical security) at small / middle scale schools were significantly high, as compared with large scale schools. Comparing the small and middle scale schools, mutual assistance / cooperation among children was found to be significantly high in small scale schools; homeroom solidarity was significantly high in middle scale schools. 2. As to relationships with teachers, the length of children-teacher (including principal and head teacher) contact time became longer and its frequency higher as the school scale got smaller. In an analysis of the relationships among children, a significantly higher degree of contact was found between older and younger children at small scale schools as compared with middle and large scale schools.

#### 問 題

本研究は、学校規模が児童の人間関係(「対教師関係」「児童相互関係」)及び学校モラル(「学級連帯性」「学校満足」「援助・助け合い」及び「心身の安定」)に及ぼす影響について分析したものである。

集団規模(group size)が、集団過程の様々な側面に如何なる影響を及ぼすかについての分析が、これまで実験室的研究や現場研究によって行われてきた。Shaw (1976) は、主として実験室的研究データを基に、集団規模と、集団成員の参加、リーダーシップ、集団成員の反応、意見の一致、及び集団成果との関係について検討を行っている。まず、集団成員の参加との関係では、集団が大きくなればなるほど、討議への参加、意見を述べる機会やコミュニケーション率が少なくなる。また、少数のメンバーによる支

配が生じ、最も活動的な成員と、その他の成員との差が大きくなる。対人関係を維持することの困難性も増加し、成員の集団に対する否定的感情を生じやすく、モラルや満足度が低下する。また、集団規模の増大は、斉一性への圧力を強める。集団の効果性との関係では、一般に集団規模の増大に伴って低下する。但し、集団成員の誰か1人が完成すればよい、といった分離的課題の場合には、規模の増大に伴って効果性が(一定の規模水準まで)増大する、といったことを明らかにしている。

ところで、実験室的研究を主とする以上の結果に対し、会社等の企業組織、工場、病院、地域社会及び学校等で行われた現場研究での結果でも、モラルや満足度、活動量、欠勤、事故回数、手術後の死亡率といった結果変数において同様の関係が見出されるとしている(Barker & Gump 1964)。Barker & Gump らは、学校規模、即ち、学校在籍者数が18名から2,287名までの様々な規模の高等学校において一連の研究を行っている。その結果、1. 大規模

\* 学校教育(心理学科)

\*\* 天草郡松島町立今津小学校

校は小規模校よりも、1行動場面での生徒数の平均密度が高い。2.大規模校ほど、各行動場面です生活する生徒数の平均が大きい。3.大規模校ほど、行動場面での種目数が多い。4.生徒千人当たりの、地区競技会や協議会への参加人数は、学校規模を9等分した場合、最大規模の学校群において最も少なく、最大は、規模の小さい方から、2,3番目(61名から85名)の学校においてであった。5.高等学校3年間(4年生高校では4年間)に行った課外活動について、小規模校では、活動経験なしや、1つ以上3つ以下の活動しかしていないと報告する生徒数は少なく、21以上の活動をしたとする生徒数が相対的に多くなっている、といった結果を見出している。

本研究では以上の諸研究結果を参考に、小学校における学校規模の違いが、児童と教師の関係、児童相互の関係、及び学校モラルに及ぼす効果について分析したものである。

仮説は次の通りである。

1.児童の人間関係は、学校規模が小さいほど、即ち、小・中・大規模校の順番で接触度(接触時間・回数、内面的つながり)は高くなるであろう。

2.学校モラルは、学校規模が小さいほど、即ち、小・中・大規模校の順番で高くなるであろう。

## 方 法

### 調査対象

調査対象は、K市内の公立小学校8校の5年生、計719名(22学級)である。この8校は、当該学年6学級の大規模校2校、3学級の中規模校2校、及び1学級の小規模校4校からなる。1校当たりの児童及び教職員数の内訳は、大規模校で児童数約1,200人、教職員数約43人、中規模校では、児童数約600人、教職員数約25人、小規模校では児童数約90人(但し1校のみ約180人)、教職員数約11名である。調査対象校の人数(学級数)の内訳は次表の通りである。

### 調査時期

平成6年11月下旬から12月上旬に行われた。

### 調査方法

調査は学校に依頼し、学級担任教師により学級単位の集合調査法により実施された。

### 調査項目

質問紙の内容は次の通りである。

#### 1.児童の人間関係に関する調査項目

- (1) あなたは、校長先生、教頭先生の名前を知っていますか、知っている人は、名前を書いて下さい。名字だけでもいいです。

校長先生の名前( )

教頭先生の名前( )

- (2) あなたは、担任以外の先生から、あなたの名前を呼ばれることがありますか(校長先生、教頭先生もいれていいです)。

(5.とてもよくある, 4.よくある, 3.ときどきある, 2.あまりない, 1.まったくない)

- (3) あなたは、困ったことがあるとき、担任の先生以外に、相談できる先生がいますか。

(2.いる「 」人ぐらい, 1.いない)

- (4) あなたは、昼休みなどの休み時間、だいたい何人ぐらいで遊びますか。

(1.自分1人で, 2.2~3人で, 3.4~5人で, 4.7~10人で, 5.10人~20人で, 6.20人以上で遊ぶ)

- (5) あなたは、昼休みなどの休み時間、どんな人たちと一緒に遊びますか。当てはまるものに1つだけ○をつけて下さい。

(1.一人で遊ぶことが多い, 2.いつも同級生と遊び、上級生や下級生とは遊ばない, 3.同級生と遊ぶことが多いが、上級生と遊ぶこともある, 4.同級生と遊ぶことが多いが、下級生と遊ぶこともある, 5.同級生と遊ぶことが多いが、上級生・下級生と遊ぶこともある, 6.その他)

- (6) あなたは、休みの日には、だいたい何人ぐらいで遊びますか。

(1.自分1人で, 2.2~3人で, 3.4~5人で, 4.7~10人で, 5.10人~20人で, 6.20人以上で遊ぶ)

- (7) あなたは、休みの日には、どんな人たちと一緒に

調査対象校の内訳

	大規模校		中規模校		小規模校			
	A校	B校	C校	D校	E校	F校	G校	H校
調査対象人数	217	194	99	113	21	21	40	14
(調査学級数)	(6)	(6)	(3)	(3)	(1)	(1)	(1)	(1)
児童数(計)	1,156	1,199	574	623	86	92	191	91
教職員数(計)	41	44	26	24	10	11	11	11

に遊びますか。当てはまるものに1つだけ○をつけて下さい。

(1.一人で遊ぶことが多い, 2.いつも同級生と遊び, 上級生や下級生とは遊ばない, 3.同級生と遊ぶことが多いが, 上級生と遊ぶこともある, 4.同級生と遊ぶことが多いが, 下級生と遊ぶこともある, 5.同級生と遊ぶことが多いが, 上級生・下級生と遊ぶこともある, 6.兄弟姉妹と遊ぶことが多い, 7.その他)

## 2. 学校モラルの調査項目

- (1) あなたのクラスはまとまっていると思いますか。
- (2) あなたのクラスは, 友だちが失敗したり困ったりしているときに助け合いますか。
- (3) あなたのクラスでは, 話し合いのときすぐに意見がまとまりますか。
- (4) あなたのクラスは, 学級会などで意見がたくさん出ますか。
- (5) あなたのクラスの人は, きちんと掃除をしていますか。
- (6) あなたのクラスの人は, クラスの物や学校の物を大切にしていますか。
- (7) あなたのクラスの人は, みんなで決めたクラスの目当てを守っていますか。
- (8) あなたは, 学校へ行くのが楽しいですか。
- (9) あなたは, 学校では落ち着いて勉強できますか。
- (10) あなたは, 学校で頭やお腹が痛くなるようなことがありますか。
- (11) あなたは, 学校での授業は楽しいですか。
- (12) あなたが困っているとき, 上級生はあなたを助けてくれますか。
- (13) あなたは, 下級生が困っているとき, 下級生を助けてあげますか。

(回答は5段階選択肢「5.とても(いつも)〜である, から, 1.全く〜でない」の中から, 1つを選択してもらった)

## 結 果

### 学校規模別にみた児童の人間関係

表1は, 学校における児童の人間関係(学校規模別)の尤度比検定と残差分析(篠原, 1989による)の結果を示したものである。まず, 対教師関係のうち, 校長(教頭)の名前(姓・名ともに, 又は何れか一方)を知っている児童の割合は, 規模の小さい学校ほど大きいといえる。即ち, 小・中規模校では約7割の児童が校長の名前を記述しているのに対し, 大規模校では, 4割近い37.2%の児童は知らないと

回答している。小規模校では, 姓・名ともに記入している者が22.9%(中規模校では6.1%)となっている。一方, 教頭の名前についてみると, 知らないとする児童の割合が, 中・大規模校では, 80%前後の高い割合を示しているのに対し, 小規模校では43.8%と有意に低くなっている。

次に, 担任以外の先生から名前を呼ばれる程度についてみると, 呼ばれるとする児童の割合は, 大, 中, 小規模校の順に, 21.7, 32.6, 46.9%となっており, 学校規模が小さいほど高くなる結果を示している。また, 担任以外に相談できる先生がいるかについては, 「いる」と回答している者の割合が, 小・中規模校において, 58.3%, 59.7%であり, 大規模校の49.0%に比較して有意に高くなっており, 「いない」とする者の割合は, 逆に大規模校で51%と高くなっている(小・中規模校では約41%)。なお, 相談できる先生の数としては, 1人〜3人とする者の割合が全体的に高くなっている。

児童相互の関係についてみると, 昼休み等の休み時間に, 誰と何人ぐらいで遊ぶかについては, 大・中規模校では4, 5人から10人で「同級生」と遊ぶとする者の割合が, 64.8%, 67.1%と小規模校の40.9%に比較して有意に高くなっている。一方, 小規模校では同級生だけでなく, 「上級生や下級生とも」遊ぶとする者の割合が31.2%と10%以下の大・中規模校に比較して有意に高くなっている。なお休日での遊びでは, 2, 3人から4, 5人で遊んでいる者が全体的に多い。但し, 小規模校の場合には, 1人遊びや7〜8人という比較的大人数で遊ぶ児童が, 中・大規模校に比較してやや多いことがわかる。休日での遊び相手については, 学校規模間で有意差はみられない。

### 学校規模と学校モラル

#### 1. 学校モラルの因子分析結果

表2は, 学校モラルに関する因子分析の結果を示したものである。因子分析の手法は, 主因子法によって因子を抽出した後, バリマックス回転を施すという手法を用いた。1つの因子に, 500以上の因子負荷量を示し, 他の因子が, 450以下の因子負荷量を示す項目を基に各因子の解釈を行った。その結果, 第1因子に高い負荷量を示す項目(括弧内は因子負荷量)は, 「クラスの人は, みんなで決めた目当てを守っている」(.744), 「クラスの人は, きちんと掃除をしている」(.716), 「クラスの人は, 学校やクラスの物を大切にしている」(.670), 「話し合いのとき, すぐに意見がまとまる」(.658), 「クラスは, よくま

表1 学校における人間関係(学校規模別)の尤度比検定と残差分析の結果

学校規模	質問項目及び選択肢/人数(%)			調整後の残差		
<u>校長先生の名前を知っているか</u>						
	知らない	姓名一方	姓名両方	知らない	姓名一方	姓名両方
大規模校	153(37.2)	201(48.9)	57(13.9)	2.527*	-3.057**	0.995
中規模校	62(29.3)	137(64.6)	13(6.1)	-1.520	3.756**	-3.459**
小規模校	25(26.0)	49(51.0)	22(22.9)	-1.638	-0.588	3.189**
$\chi^2=26.624, df=4, p<.01$						
<u>教頭先生の名前を知っているか</u>						
	知らない	姓名一方	姓名両方	知らない	姓名一方	姓名両方
大規模校	322(78.4)	85(20.7)	4(1.0)	1.671†	-0.991	-2.190*
中規模校	182(86.3)	29(13.7)	0(0.0)	4.136**	-3.447**	-2.438*
小規模校	42(43.8)	44(45.8)	10(10.4)	-7.965**	6.055**	6.446**
$\chi^2=73.293, df=4, p<.01$						
<u>担任以外の先生から名前を呼ばれることがあるか</u>						
	全く呼ばれない	時々呼ばれる		よく呼ばれる		
	1	2	3	4	5	
大規模校	14(3.4)	83(20.2)	225(54.7)	76(18.5)	13(3.2)	
中規模校	4(1.9)	40(18.9)	99(46.7)	51(24.1)	18(8.5)	
小規模校	0(0.0)	11(11.5)	40(41.7)	34(35.4)	11(11.5)	
$\chi^2=35.325, df=8, p<.01$						
<u>困った事がある時、担任以外に相談できる先生がいるか</u>						
	いない	いる		いない	いる	
大規模校	208(51.0)	200(49.0)		2.723**	-2.723**	
中規模校	85(40.3)	126(59.7)		-2.181*	2.181*	
小規模校	40(41.7)	56(58.3)		-1.036	1.036	
$\chi^2=7.493, df=2, p<.05$						
<u>担任以外に、相談できる先生が何人ぐらいいるか</u>						
	1人	2人	3人	4人	5人以上	
大規模校	59(30.4)	60(30.9)	41(21.1)	7(3.6)	27(13.9)	
中規模校	18(14.9)	45(37.2)	33(27.3)	9(7.4)	16(13.2)	
小規模校	16(28.6)	22(39.3)	12(21.4)	4(7.1)	2(3.6)	
$\chi^2=18.535, df=8, p<.05$						
<u>昼休み等の休み時間、だいたい何人ぐらいで遊ぶか</u>						
	1人	2-3人	4-5人	7-10人	10-20人	20人以上
大規模校	4(1.0)	65(15.8)	151(36.7)	121(29.4)	52(12.7)	18(4.4)
中規模校	4(1.9)	36(17.1)	86(40.8)	55(26.1)	14(6.6)	16(7.6)
小規模校	5(5.3)	12(12.6)	20(21.1)	19(20.0)	30(31.6)	9(9.5)
$\chi^2=48.353, df=10, p<.01$						
<u>昼休み等の休み時間、どんな人たちと遊ぶか</u>						
	1人で	同級生	同+上	同+下	同+上・下	
大規模校	4(1.0)	256(64.8)	46(11.6)	61(15.4)	28(7.1)	
中規模校	5(2.4)	139(67.1)	28(13.5)	23(11.1)	12(5.8)	
小規模校	6(6.5)	38(40.9)	10(10.8)	10(10.8)	29(31.2)	
$\chi^2=54.888, df=8, p<.01$						
<u>休日には、だいたい何人ぐらいで遊ぶか</u>						
	1人	2-3人	4-5人	7, 8人以上		
大規模校	13(3.2)	212(52.2)	142(35.0)	39(9.6)		
中規模校	17(8.3)	93(45.1)	87(42.2)	9(4.4)		
小規模校	12(12.5)	46(47.9)	22(22.9)	16(16.7)		
$\chi^2=33.178, df=6, p<.01$						
<u>休日には、どんな人たちと遊ぶか</u>						
	1人で	同級生	同+上	同+下	同+上・下	兄弟姉妹
大規模校	20(5.6)	103(29.1)	38(10.7)	67(18.9)	57(16.1)	69(19.5)
中規模校	13(7.1)	67(36.8)	21(11.5)	31(17.0)	21(11.5)	29(15.9)
小規模校	10(11.2)	26(29.2)	11(12.4)	14(15.7)	18(20.2)	10(11.2)
$\chi^2=12.555, df=10, ns$						

(注)\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ , † $p<.10$ .

表2 学校モラルに関する因子分析結果

項目内容	因子負荷量				共通性
	I	II	III	IV	
Q 7 クラスは、みんなで決めためあてを守っている	.744	.151	.166	.044	.606
Q 5 クラスでは、きちんと掃除をしている	.716	.065	.244	.057	.580
Q 6 クラスの人は、クラスや学校の物を大切にしている	.670	.052	.326	-.012	.558
Q 3 クラスでは、話し合いの時、すぐに意見がまとまる	.658	.186	-.077	.133	.490
Q 1 クラスは、よくまとまっている	.534	.411	-.011	-.226	.506
Q 4 学級会などで意見がたくさんでる	.534	.226	.016	-.004	.336
Q 2 友だちが失敗したり困っているとき助け合う	.437	.399	.239	-.126	.423
Q 8 学校に行くのが楽しい	.054	.838	.094	.175	.744
Q 11 学校での授業は楽しい	.225	.773	.169	.005	.677
Q 9 学校では落ちついて勉強できる	.328	.557	.193	-.070	.460
Q 13 下級生が困っているとき助けてあげる	.185	.117	.788	-.081	.675
Q 12 困っているとき、上級生が助けてくれる	.089	.211	.763	.023	.634
Q 10 学校で頭やお腹が痛くなるようなことはない	.450	.057	-.051	.956	.926
因子分散	4.320	1.199	1.171	.928	7.617
寄与率(%)	33.2	9.2	9.0	7.1	58.6

表3 学級規模と男女別学校モラル

## 3-1 学級連帯性

学校規模	男	女	計	分散分析		対比較(Tukey法) $p < .05$
				要因	F 値	
大規模校	3.00(0.63)	3.06(0.58)	3.03(0.60)	A (規模)	24.611**	中>小>大
中規模校	3.53(0.59)	3.51(0.53)	3.52(0.56)	B (男女)	0.000	
小規模校	3.27(0.60)	3.23(0.68)	3.25(0.63)	A×B	0.286	
計	3.29(0.65)	3.27(0.61)	3.28(0.63)			

## 3-2 学校満足

学校規模	男	女	計	分散分析		対比較(Tukey法) $p < .05$
				要因	F 値	
大規模校	3.60(0.87)	3.58(0.94)	3.59(0.90)	A (規模)	7.915**	小=中>大
中規模校	3.89(0.61)	3.98(0.71)	3.93(0.65)	B (男女)	0.960	
小規模校	3.79(0.79)	3.94(0.74)	3.86(0.77)	A×B	0.442	
計	3.76(0.76)	3.81(0.84)	3.78(0.79)			

## 3-3 援助・助け合い

学校規模	男	女	計	分散分析		対比較(Tukey法) $p < .05$
				要因	F 値	
大規模校	2.31(0.79)	2.87(0.80)	2.58(0.84)	A (規模)	24.389**	小>中>大
中規模校	2.76(0.86)	3.08(0.77)	2.89(0.83)	B (男女)	18.926**	
小規模校	3.14(0.89)	3.34(0.86)	3.26(0.87)	A×B	2.271	
計	2.67(0.90)	3.05(0.81)	2.84(0.88)			

## 3-4 心身安定

学校規模	男	女	計	分散分析		対比較(Tukey法) $p < .05$
				要因	F 値	
大規模校	3.73(1.08)	3.41(0.80)	3.58(0.96)	A (規模)	0.028	男>女
中規模校	3.67(0.97)	3.52(0.85)	3.60(0.92)	B (男女)	9.318**	
小規模校	3.75(0.82)	3.42(0.75)	3.59(0.80)	A×B	0.447	
計	3.71(0.98)	3.45(0.81)	3.59(0.92)			

## 学校モラル計

学校規模	男	女	計	分散分析		対比較(Tukey法) $p < .05$
				要因	F 値	
大規模校	3.16(0.54)	3.23(0.49)	3.19(0.51)	A (規模)	17.263**	小=中>大
中規模校	3.46(0.50)	3.52(0.46)	3.49(0.48)	B (男女)	0.597	
小規模校	3.50(0.50)	3.48(0.43)	3.49(0.46)	A×B	0.363	
計	3.36(0.53)	3.39(0.49)	3.37(0.51)			

(注)\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ .

とまっている」(.534),「学級会などで意見がたくさ  
でる」(.534)の6項目であった。これらは、学級  
協力・連帯、まとまりに関する項目であるから、  
第1因子を「学級連帯性」の因子と命名した。第2  
因子に高い因子負荷量を示す項目は、「学校に行くの  
が楽しい」(.838),「学校での授業は楽しい」  
(.773),「学校では落ち着いて勉強できる」(.557)  
の3項目であった。これらは、学校生活への満足度  
に関する項目であるから、第2因子を「学校満足」  
の因子と命名した。第3因子に高い因子負荷量を示  
す項目は、「下級生が困っているとき助ける」  
(.788),「困っているとき、上級生が助けてくれる」  
(.763)の2項目であった。従って、第3因子を「援  
助・助け合い」の因子と命名した。第4因子に高い  
因子負荷量を示した項目は、「学校で頭やお腹が痛く  
なるようなことはない」(.956)の1項目であった。  
従って、第4因子を「心身の安定」の因子と命名し  
た。

## 2. 学校規模と学校モラル

表3は、学校規模、男女別にみた学校モラルの  
結果について示したものである。まず、学校規模の  
主効果では、「心身安定」の因子を除く各モラル因  
子及び「学校モラル計」において有意差が見出さ  
れた。対比較の結果、何れも大規模校において最低  
となる結果を示している。小・中規模校間の関係で  
は、「学級連帯性」では、中規模校において高く、ま  
た「援助・助け合い」因子においては、逆に小規模  
校において最も高い結果を示している。

性差については、「援助・助け合い」において女子  
の方が男子よりも高く、「心身安定」の因子では男子  
の方が高い結果を示している。なお、学校規模と性  
差の交互作用には何れも有意差は見出されなかった。

## 考 察

本研究は、学校規模が児童の人間関係及び学校モ  
ラルに及ぼす影響について分析したものである。  
調査対象は、小学校5年生で、当該学年の学級が6  
学級の大規模校2校、3学級の中規模校2校、及び  
1学級の4校であった。1校当たりの内訳は、大規  
模校で児童数約1,200人、教員数約42人、中規模校で  
は、児童数約600人、教員数約26人、小規模校では  
児童数約90人(但し1校は約180人)、教員数約11名で  
ある。こうした児童と教師の絶対数や人数比及び学  
級数等の違いが、児童の対教師認知や教師の対児童  
関係をはじめ、相互の人間関係に影響を及ぼすもの  
と考えられる。以下、こうした視点から考察するこ

とにする。

### 学校規模と児童の人間関係

まず、校長(教頭)の氏名を知っている児童の割  
合は、小規模校において最も高く、中・大規模校と  
規模が大きくなる程、割合が低くなる結果を示して  
いる。その理由の1つとしては、校長(教頭)の存  
在が、教職員数との関係で、小さい学校ほど顕現化  
(認知)されやすいこと。また、校長(教頭)と児童  
の接触時間や回数が、児童数の少ない小規模校程増  
大すること、等の理由により、校長(教頭)の氏名  
の認知が高められるものと考えられる。同様の結果  
は、担任以外の教師との関係についてもいえるであ  
ろう。即ち、担任以外の先生から名前を呼ばれるこ  
とが「ある」と回答している者の割合が、小規模校  
において最も高く、中・大規模校で低くなる結果を  
示している。こうした、校長(教頭)を含む教師た  
ち全体との接触機会の増加は、困った事がある時、  
担任以外に相談できる先生がいるかに対し、「いる」  
と回答する児童の割合が、小・中規模校において有  
意に高く、大規模校で低くなる結果を導くものとし  
て解釈される。換言すれば、学校規模が大きくなる  
につれて、特に大規模校では、教師集団全体の指導  
力(リーダーシップ)が相対的に低くなることを示  
唆するものといえる。

児童相互の人間関係については、学校規模の違い  
によって特徴ある結果が見出された。まず、小規模  
校の場合には、昼休みの時間等に、上・下級生と遊  
ぶとする者の割合が、中・大規模校に比べて有意に  
高くなっている。これに対し、中・大規模校では、  
もっぱら同級生だけで遊ぶ者が約65%と高い割合を  
占めている。こうした背景には、小規模校の全学年  
を合わせた児童数90名という数が、中規模校の同学  
年だけの児童数、約100名にも及ばないこと。また、  
こうした児童数の違いによって生じてくる、運動場  
や校舎内での(例えば、中・大規模校では同学年の  
学級が、そして小規模校では上・下級生の教室が隣  
接している等)の児童相互の物理的(距離的)関係  
が児童相互の人間関係を規定してくるものといえる。  
なお、休日における遊び相手については、学校規模  
の違いによる差は見出されなかった。ただ、1人で  
遊ぶ者の割合が、小規模校において約10%と、中・  
大規模校に比較してやや高くなっているのが注目さ  
れる。

以上の考察から、仮説1、児童の人間関係は、学  
校規模が小さいほど、即ち、小・中・大規模校の順  
番で接触度(接触時間・回数、内面的つながり)は

高くなるであろうは、大筋において支持されたといえる。

#### 学校規模と学校モラル

まず、全体的な学校モラルの結果については、「学校モラル計」をはじめ、各モラル（但し、学校規模間で有意差が見い出されない「心身安定」を除く）項目の、小・中規模校での得点が、大規模校よりも有意に高くなることを示している。但し、小・中規模校間では、中規模校の「学級連帯性」が小規模校よりも、また「援助・助け合い」では、小規模校において中規模校よりも有意に高くなる結果を示している。全体として、大規模校における学校モラルが低くなる結果については、先にも考察したように、児童と校長（教頭）を含む教師との全体的な結び付きが希薄であることや、児童たち相互の関係の特質等が影響しているものと思われる。

ところで、中規模校での「学級連帯性」が最も高くなることの理由として、中規模校の場合に、同学年（5年生）の児童全員がお互いに知己関係にあることが上げられるであろう。何故なら、2年に1度のクラス編成が行われるとすると、5年生までには（入学時を含めて）3回のクラス編成が行なわれることになり、確率から見てほぼ全員の児童と1度は同じ学級の一員になることが考えられるからである。こうした知己関係は、基本的に児童たち相互の結び付きや連帯性を高める方向に作用するであろう。しかし、同学年の児童全員が知己関係にあるという点では、小規模校が中規模校以上に高いであろう。それにもかかわらず、中規模校における「学級連帯性」得点が、小規模校よりも高いということは、知己関係の要因だけではなく、学級（集団）間関係も影響を及ぼすものと思われる。即ち、3学級からなる中規模校の場合には、1学級の小規模校や、6学級の大規模校（この場合全員が知己関係にはない）に比較して、適度の競争関係が刺激されるなど集団相互のダイナミックスが、学級連帯性を高める要因とし

て作用していることが考えられる。

次に、上・下級生間の「援助・助け合い」の因子についてみると、小規模校において最も高くなる結果を示している。これは、学校での昼休み等における遊びやスポーツ、あるいはその他の児童会などの様々な学校行事が、上・下級生を交えて行なわれる機会が多いことも原因として上げられるであろう。男女の比較では、女子において、上・下級生間の「援助・助け合い」の程度が高くなっている。その他、学校生活に対する満足度（「学校満足」）では、小・中規模校間に特に差は見い出されず、大規模校において有意に低くなる結果が見い出されている。なお、頭やお腹が痛くなる等の結果は、学校規模間には有意差は見い出されなかったが、男女間では女子において高くなる結果が見い出された。

何れにしても、以上の結果は、学校規模がある限度を超えて大きくなると、教師集団全体の指導力が減少することを併せて示唆するものであろう。

以上の考察から、仮説2、学校モラルは、学校規模が小さいほど、即ち、小・中・大規模校の順番で高くなるであろうについては、小・中規模校と大規模校との間については仮説が支持されたといえる。但し、小・中規模間には全体として大きな差は見出されなかった。

#### 引用文献

- Baker R. G. & Gump P. V. (Eds.) 1964 *Big School, Small School: High school size and student behavior*. Stanford University Press (安藤延男監訳 1982 大きな学校、小さな学校—学校規模の生態学的心理学— 新曜社)
- Shaw M. E. 1976 *Group Dynamics: The Psychology of Small Group Behavior*. McGraw-Hill. (原岡一馬訳 1981 小集団行動の心理 誠信書房)
- 篠原弘章 1989 行動科学のBASIC 第5巻 ノンパラメトリック法 ナカニシヤ出版